

「磐座」、岩-木・太陽崇拜の霊域としての「磐境・磐城」

—— 地名「磐城」と「磐梯山」信仰 —— [研究ノート・調査報告](2)*

茨木 竹二

○はじめに —— 地名「磐城」は、古来「磐梯山」信仰と関わりがあるのか

標記と同題の「第一次(報告)」では、地名「磐城」が、そもそも太古の「磐座信仰」の「磐境(いわき)・磐城(いわき)」に由来するのでは、という想定に基づき、またいずれはその発掘・検証の実現をも期待し、当面はできるだけいわき市内や周辺の関連地域における「磐座信仰」の遺跡や遺物と思しき地点を実地探訪し、その「岩-木・太陽崇拜」としての主な諸要件を確認・記録しようとした。そして、それによってそうした諸要件は、総体的であれ部分的であれ、それ相応の諸範例をもって、殆んどすべての地点で確認された。

しかしながら、そのように更に確認されるべき地点は、未だ他にも多く残っており、市内では特に小川・丑の倉や平赤井の周辺が、昨年度の同地区調査との関連で重要であった。また、周辺の当該関連地域・地点ともなると、特に磐梯山は古来地元では「いわはし山」と呼ばれ、「磐」が用いられているのみならず、その西麓 磐梯町の「磐梯(ばんだい)神社」では、元々この山自体が「神体山」として遥拝されてきたことから、おそらく「磐座信仰」に通じているに相違ない。

それどころか、その東麓 猪苗代町の「磐椅神社」は、古来そのように表記されながらも、むしろ「いわはし神社」と呼ばれるのが正しいとされたにも拘らず、地元ではやはり「いわきさま」と呼び習わされてきたため、「磐城」と音読みでは、同じことになる。更に猪苗代湖南、郡山市・福良の「隠津島神社」の本殿裏手には、三角錐の巨岩「烏帽子岩」や、社の中に「蛇神」を祀る「風穴(堂)」があり、それらもまた「磐梯山信仰」や「磐座信仰」の範例と見受けられる。ところが、そのような聞知やネット情報¹⁾による推定にも拘らず、それらの地点も、市内のそれと同様、未だ確認・収録が、今後の課題として残されていた。

そこで、此度の調査は、そうした課題を果すべく、実施された次第である。したがって、以下ではまず、それによって確認・収録された上記諸要件・範例等の調査結果を、「第一次」と同様中間総括として、むろん本稿の観点において記述し、次にまたそれと同様小括として、ただ本調査の趣旨は、そもそも地名「磐城」の由来遡及にあるため、特にそれと上記「いわきさま」との関連如何についても、幾分考察したい。

尚、そうした既述の際には、基本的に「第一次」の要領に倣うものの、当該地点への方向や(直線)距離をおおよそ指示する基点は、JR 磐越線の最寄駅としたい。

1. 中間総括 —— いわき市内北／北西部、西会津及び猪苗代湖周辺の「磐座」探訪

さて、以上の経緯において、2014年3月から11月にかけて（ゼミ担任単独で、学生とは4月末から9月半ばにかけて合同で且つ集中的に）、前半はいわき市北／北西部の中山間地、小川町・丑の倉と平赤井、及び同じく南の平野部、小名浜・相子島／住吉／玉川町、後半は県北西部、新潟県境に近い西会津町大久保から、猪苗代湖北部、磐梯山西麓の磐梯町・磐梯八幡と同北部、南麓の猪苗代町・西峯、更に同南部、郡山市湖南町福良における「山の神・蛇・磐座信仰」の遺跡（物）と思しき地点を探訪し、以下のようにそれらの諸要件・範例を確認・収録した次第である。（但し、日付については、上記期間中、すべて2～3回は訪れているので、付記しないでよいであろう。）

1) 市内北部・中山間地及び南部・平野部の「磐座信仰」の諸要件・範例

そこで、まず末尾「資料」の①～⑥に従い、上記の確認・収録事項を記述すると、およそ以下の通りである。

①小川（柴原）・丑の倉の「大石」—— 北、3.4k、（目測）350m

「第一次」の「資料」②で示した小川町・桐ヶ岡の「(大)山祇神社」とは、（同じ柴原でも）その東側500mほどの位置にあり、また標高も少し高いくらいであろう。更に、同じく北側上方の「月山」や「二ツ箭山」の中腹に当たるものの、上記「神社」のように石造りの参道、鳥居、本殿、奥宮、祠等がなければ、また近辺に遥拝するような社も、何ら見当たらない。しかし、県道「小川－四倉線」から林道に入って至る入口手前には、高さ3～4m、幅5～6mの石が、二つほど並んでいて、更にそこから山道を50mほど登ると、正面に高さ25m、幅30mほどの「半円（円錐）形」の「大（巨）石」が立ちはだかっている。

とにかくそれは、市内では特に湯本の「青葉山」のように、山全体としての大規模な「石（山）」でなく、むしろ単体としての「岩石」では、かの「宇宙石」の高さを凌いでいるに違いない。尚、裏側の土手は、「大石」の突端に近い高さでその脇に檜の木が並び立ち、周囲には杉・唐松・孟宗竹等、「蛇の象徴」に当る樹木が繁茂し、また西南に「水石山」、南西に「湯ノ岳」や、南東には主に小名浜方面の海が望見できる。したがって、以上の岩石の形状・樹木の種類・地勢は、「山の神信仰」や「太陽崇拜」の祭祀場、「磐座・磐境」の諸要件・範例と見受けられる。

但し、この「大石」は、近辺に祭祀の痕跡が何ら見当たらないことが、今後の課題であり、またむしろロッククライミングでよく知られていることも、文化財保護の上で気掛かりでもある。

②③「赤（闕伽）井嶽薬師」の「胎内くぐり」と「亀の小石」—— 北西、6.5k、約600m

同じく「第一次」の「資料」③で示した三和・合戸の「水石山」の南東側中腹に位置し、一帯は特に樹齢数百年に及ぶ無数の大杉が鬱蒼と林立し、また本殿・常福寺西側下手の旧参道には、太い孟宗竹も繁茂していて、昼でも薄暗く、森閑としている。中でも本殿南東側下手の、本尊「薬師如来」と「龍（蛇）神・竜宮信仰」にまつわる「龍燈杉」は、高さ約40m、地上2mほどの幹元の直径約4mと、おそらく当地方では最大級の大木として、他に比類がないのでは、と推測される。

そして、本殿入り口付近の県道下手の左脇には、縦・横3mほどのおよそ直方体の巨石「胎内くぐり」②が目に入る。底辺に、児童なら「這いくぐれる」ほどの空洞があることから、そのように呼ばれるのであろう。ただそれは、そのように「母胎」に「見立て」られているわけであるから、明らかに「蛇」の象徴と同時にまた、「蛇」を「遣い」とする「山の神信仰」の表徴と、見なすことができる。

というのも、また本来「山の神」は「治山・治水」を靈威としているので、上記の通り大杉が多く生立ち且つ本殿左下に「引法水」が湧き出ているように、この一帯が元来降雨や水脈に恵まれた湿潤地帯で、それらが靈験と信じられてもきたであろうからである。更に、そもそも「閼伽井」は、「仏に供える水の井戸」を、また「赤」は「水」一般も、意味しているからである。

それに、本殿から旧参道を「三丁」ほど、約400m下ったところで、③の「亀の子石」が横たわっている。左側の頭部は長さ4m、右側の胴体部が長さ6m（高さ3m）と、間に幹元直径1mくらいの大杉が生立っているが、双方併せて10mほどの巨石である。そこで、そうした呼称は、同じく「竜宮・龍（蛇）神信仰」にまつわっていることを、やはり示していよう。最後に、この境内からは、南方の「湯ノ岳」や小名浜沖から、東方の四倉沖まで一望できるので、往古は「御来光」や「日の出」の位置により、「日立ち」や「日経（だ）ち」とともに、時節の移り変りを看取り、例年「山の神」や「天神（日神）」の恵みを占う祭祀も、おそらく執り行われたことであろう。となると、それも含め以上、まず本殿入り口付近の両巨石は、（いずれも花崗岩と見受けられる）各々の「呼称」や「形状」において、次にまた周辺一帯の大杉の繁茂や竹林、更に湧き水や湿地も、「山の神・蛇・天（海）神信仰」を含む「磐座」の要件・範例として、すべて認めてよいであろう。

尚、「赤井嶽薬師ご案内」には、およそ以下の縁起が記されている。「この寺院は西暦735(天平6)年に基礎が築かれ、当時大地震の発生や疫病の流行で混乱を極めていたこの土地に、源観と名のる大和国の僧が訪れ、現常福寺より北西約2kmにある〈剣ヶ峰〉に薬師如来を安置し、37日間の祈願の末、その混乱を治めた。それから72年後、諸国を漫遊していた僧・徳一大師が、風雨に晒される薬師如来の姿を憂い、現常福寺の場所に安置し、堂塔伽藍を造営した」とのことである。ただ、「それから72年後」となると、おそらく「大同二(807)年」となって、例えば特に高橋富雄『徳一と最澄——もう一つの正統仏教』²⁾によると、「徳一(とくいつ)大師」が、同じく「大和国から会津に下着して慧(恵)日寺の前身、清水寺を建立」した「大同元(806)年」——すなわち「磐梯山爆発」の年次ないしおよそ「大同二(807)年」——と同年次となって重なるので、かなり考えにくいものの、とにかくいずれも「徳一」の貢献として共通することから、以下の小括で一つの重点となるので、ここに付記しておきたい。

④小名浜・相子島(字兜里)の「兜(かぶと)神社」——南、2.4k

④の地点は、次に記す⑤「住吉神社」の地点と、方角も距離もほぼ同じで、その400mほど東側に位置している。周辺一帯は、北から矢田川、西からは藤原川が貫流し、いずれも2kほど先で、小名浜の海辺に注ぐ三角州とともにまた扇状地も形成し、更に北方の矢田川沿いの鹿島町地区の入口には、「船戸」という地名があるように、かつては海辺から磯が続いていて、近世までは船が出入りする遠浅や湿地帯であった。まず、「相子島」という呼称は、④の例祭日が⑤の例大祭

と同じになっていて、密接な因縁を示しているように、またそうした地勢で同様に小さく、隣合せて浮かぶ「岩石の小島」として、あたかも「相子」や「相方」同士のように見なされる類縁・対等の景観から、そのように呼ばれたのであろう。

次に、「兜神社」は高さ10m、周囲の直径20mほどの、明らかに海底から隆起したと見られる小高く、上部が平たい「円錐形」で、なるほど「兜」の形をした大きな砂岩の南面におよそ縦2.5m、横4m、奥行5mほどの洞窟が「社」の内部に、また奥の正面1.5mほど上には縦0.5m、横0.8mほどの神棚も、掘られてある。更に入口扉の前、鳥居の両側には銀杏の古木が並び立ち、上方や周囲は特に榊や孟宗竹が、多く生えている。

そこで、そうした「岩石の小島」は、およそ「円錐（兜）形」の小さな「神体山」として、またそのように「蛇」の象徴たる樹木やその生息に適した湿地帯からしても、「山の神・龍神信仰」の「神籬」として、更には如上の地勢からして「天（海）神信仰」の「社」として、それらを含む「磐座信仰」の範例と見なすことができよう。

尚、「磐座」は神の来臨・鎮座する「台座」として、何も山岳やその頂上・中腹・麓の大小「岩石」に限らず、「第一次」で述べた「三輪山」頂上の「奥津磐座」や、それどころか同じく「第一次」で記した市内豊間の「二見ヶ浦」のように、正に「磯の岩場／巨岩」の如き場所にも見受けられることから、如上の地点で認められても、何ら例外ではありえない。

⑤小名浜「住吉神社」の「磯山」—— 同上

正にそのように「磯の岩場／巨岩」というべき「磐座」が、当「神社」境内の裏手に明らかに認められる。そこには、高さ約15m、周囲の直径30mほどの「円錐形」で、写真はその裏側であるが、海水による浸蝕が顕著で、さながら「磯の小島」として控え、正に「磯山」と呼ばれるに相応しい。³⁾ 全体に大きめの立石・三角岩等が数多く重畳し、並びに杉・檜の木・榊等の古木や孟宗竹で覆われ、むろん「天然磐座」でありながら、あたかも小さな「神体山」や「神籬」でもあるかのような観を呈し、しかも本殿正面には銀杏の古木も低く斜めに生えていて、それらの石／樹木の形状・種類は、すべて「蛇（龍）神」の象徴に当る。更に、当地点が遠浅・湿地帯や、海底の隆起であったことも考え合せると、この「磯山」は④と同様、「山の神信仰」の他にも、かつては船の運行に重要な目印であったとともに、また「明神山」とも呼ばれることから、特に往古はおよそ「赤井嶽」においての如き「太陽崇拜」も、山間-平野（海浜）部の違いにおいて、むしろ船の航海の安全や大漁を祈願した「天（海）神信仰」の祭祀も、おそらく執り行われたことであろう。

尚、当「神社」は、またその「紹介」によると、「（延喜）式内社」並びに「東北一で最古の社」として、「延暦10（791）年、景行天皇の御代に、時の大臣（おおのみ）建内宿禰（たけのうちすくね）〔が〕勸請」〔というように『続日本紀』（797年完成）に記載されている〕、すなわち「同天皇の勅命を奉じて東北地方を巡視した同武内宿禰により、当地が陸と海との要害の地であり、東北の関門にもあたるので、航海安全と国家鎮護のため、東北総鎮守として祀られた」といった旨、記されている。ただ、「延暦10（791）年」の「勸請」となると、景行天皇と武内宿禰が仕えた神功皇后の年代は、大まかであるが、それぞれ紀元後100年前後と200年代半ばに当ると思われるので、それらと大幅に違い異なるため、およそ考えにくいものの、また以上は以下の小括で

も一つの接点となるため、一応ここで付記しておきたい。

⑥小名浜・金成の「岩出(山)神社」——南、1.8k、(目測)20m

当地点は、南方に玉川町を挟んで、上記相子島や住吉から臨む、北方の丘陵に位置しているので、当「神社」は、双方の地点の両「神社」とも、古来何らかの因縁があったように推測される。とにかく、「山の神様」を通称としているように、その諸要件・範例が多く揃っている。まず、写真のようにおよそ「円錐形」の小さな「杜」を想わせる、檜や椎の木／杉／松で覆われた高さ6～7mほどの丘の正面と前方に、社と鳥居が構えてあり、周囲は棚田と段々畑で、また山清水も潤沢で、幾筋もの小川が鳥居前のため池に注ぎ込み、いかにも牧歌的な情景が映し出されている。但し、次に付近には岩石が全く見当たらず、「磐座」よりは、むしろ小さな「神体山」の観がある。しかし、西側の上方には、以前採石のため削られてしまったが、岩山(標高約80m)があって、⁴⁾地元の長老に聞けば、そこからはかつて南東に小名浜の海が望みできた、とのことであるから、やはり「磐座」らしき岩石の存在や「太陽崇拜」の祭祀の可能性が、如上の因縁として考えられる。⁵⁾

因みに、例祭は最近では3月第2日曜のみであるが、以前は3月／8月／10月の18日と、3回執行され、3月の際には「お山開き」として、マタギや木挽き等、山の幸で暮らす人々が、「山入り」の時、「木の股に神宿る」として、長さ10cmほどの竹筒2本を結わえ、御神酒を入れて鳥居の注連縄に吊り下げて、供えたようである。となると、以上「岩出神社」は、そもそも「山の神信仰」、それも「蛇」のみならず、むしろまた「猪／熊」をも「遣い」とした祭祀場の足跡が伺われる。但し、その場合でも「神体山」や「杜」の「円錐形」は、「磐座・磐境」に必ず備わっている「立石」の「三角・円錐形」、並びにここでの多様な「蛇」の象徴が共通しているので、やはり「磐座信仰」の痕跡も否めない。

2) 県北西部及び、猪苗代湖北部／南部の「磐座信仰」の諸要件・範例

次に、末尾「資料」の⑦～⑬に従い、上記の確認・収録事項を記述すると、およそ以下の通りである。

⑦西会津(野沢)「大山祇(づみ)神社」の「築造磐座」——(野沢駅より)南西、7k、540m⁶⁾

当地大久保にある標記「神社」の遥拝殿から、清流の沢沿いに4kほど参道を登ると「大倉(だいくら)山」(約800m)の中腹の「御本社(奥宮)」に辿り着く。とにかく、地元・県境一帯では古来「野沢の山の神様」を呼ばれてきたように、この「神社」は「神体山信仰」の要件・範例が豊富で、正に典型をなしている。途中、いずれも「蛇」の象徴に当る「不動滝」や「弥作の滝」、溢れ出る湧水、400本にも及ぶ樹齢数百年の大杉の並木、特にホウヤブナ古木等が、随所に目にとまる。

特に、「御本社」左脇には、高さ1・幅3mほどの土台と、その上に生立つ杉の木並びに立石は、そうした「組成」からして、いかにも「築造磐座」を想わせる。これは、当「神社」ではなく、むしろ「講中」によって構えられたと聞き、またおそらく「神体山」の「神籬」にも相当し、本来の「奥宮」を偲ぶものと思われる。というのは、途中で厳しい石壁が散見されるように、全山岩石で形成され、また神職によると、「御本社」西側の頂上は元々岩山で、以前の崩落で登拝不能であるが、かつてはおそらく修験道の修行場であったと思われるので、「奥の院」と呼んでいる、

とのことであるから。

したがって、ここには上記の「組成」から、やはり「磐座信仰」の足跡が類推される。ともあれ、以上当「神社」は、本来「治山・治水（利水）」を靈威とする「山の神（地神）信仰」の祭祀場、ないし「磐座」として、少くとも周辺一帯で最も代表する類例に、おそらく相当しよう。

——「磐梯山信仰」の由緒・由来（中間付記）——

ところで、以下に記す磐梯町の「磐梯（ばんだい）神社」⑧⑨及び猪苗代町の「磐椅（いわはし）神社」⑩は、そもそも「磐梯山（ばんだいさん）」を「神体山」や「山の神／明神」として崇めてきた古来の信仰に、いずれも因み、またその由緒・由来も、諸々の古文書で様々に伝えられているものの、厳密に確証された定説は少ない。そこで、中間的ではあるが、そのように不確かな伝承でも、両「神社」の由緒・縁起はそれ相応に尊重し、また如上の伝承でも、年代や史跡・史料から歴史的知識として、およそ定かと思われる事柄を、ここで予め概括し、更にこの「山」自体の沿革も含め、主に『猪苗代町史』⁷⁾や前掲『徳一』を参照して、むろん本稿の観点において重要なかぎり、付記しておきたい。

〈山名、山号及び重層信仰〉

一般に馴染みの標記名称は、「磐梯山恵（慧）日寺」（前身は「清水寺」と記されるように、当「会津本寺」の「山号」であり、但し「山名」は漢字表記が同じでも、むしろ「いわはしやま」と呼び習われ、少なくとも「建治元（1275）年の写し」、「恵日寺御田植歌」に「^{いわはしやま}磐梯山に雲る棚びく」とあるのが『町史』（372頁）により、また『私聚百因縁集』（正嘉元〔1257〕年）に「〔徳一が〕奥州会津石梯山に清水寺を建立す」とあるのが『徳一』（例えば59頁）により、いずれも確認されている。

また『町史』では、「あたりの山々を従えて整然と裾をひき、ひときわ高く屹立する山容を、〔古来地元の人々や旅人が〕見上げ、これぞ天にのぼるかけはしならん、という素朴で雄大な想像が磐のかけはし、即ち〈磐梯〉の山名となり…」(363～364頁)とも、適切に解されている。というのは、既に「第一次」で述べたように、そのように「裾をひいて…高く屹立する山容」は、またむしろ「山角・円錐」の形状において、一般に「知覚」の働きにより、両辺が交わる先端を超越して、その延長に「異界」を想起せしめるからである。

但し、他に「石梯山」とも記されていることから、この「山」全体が岩石で形成され、あるいはまた山頂や中腹・麓に、およそ同形の立石が「磐座」のように祀られ、もしくは散在していて、またそれら岩山と岩石とが「二重映し」となっていること、とも考えられる。いずれにせよ、更に『町史』は、「朝な夕な里から仰ぐ高い山が死後の世界であり、祖霊の集まり休まれる場所であって、山の神が季節に里に下って田の神となられるのも祖霊信仰にねざすものであり、固有の山岳信仰は山岳を神のすまいする聖地と観念し、その神を登拝することを〈お山かけ〉といい磐梯山はもとは女人禁制のお山であった」(379頁)とも、説いている。そこで、そうした「お山かけ」の基となっている「信仰・観念」こそは、また正に上記「天のかけはし」の「想像」とも、相即しているように。

尚、『町史』は、上記両「神社」の創建にまつわる「磐梯山信仰」の由来について、既に以前

その頂上に祭られていた「峯の明神」を、「天平年間〔710～784〕に西麓の本寺（清水寺・慧日寺）に〔磐梯村〕大伴修験が遷宮し、そこに磐梯山信仰の基地を構えた」（364～365頁）とか「大伴修験由緒」で、また「和同（708～714）年中磐梯山頂上に磐梯神社が鎮座されたが、引仁（810～823）年中現在の見祢山南麓に遷座せしめられ…里人はこれを〈峯の明神〉と尊称する」とも「磐梯神社由緒」で、いずれも参照している（364～365頁）。但し、そのように「祭られ／鎮座された」にせよ、それらの痕跡は、以下でふれるように、以後の磐梯山爆発により、確認不能であれば、また「清水寺・慧日寺」も「天平年間」にはまだ開基されていないことにもなるので、確定困難と見られる。

序に、より以前の往古「磐梯山」は「病悩山（やまうさん）」と呼ばれていて、それは「この山の峯は常に雲上にあり、あたかも病人が鉢巻をしたのに似ているからという」とか、それに例えば『新編会津風土記』によると、「磐梯山を病悩山とて魔魅住み居て崇りをなし…しかのみならず大同元〔806〕年大爆発し、月輪、更科二荘が一夜にして湖となり溺死するもの数知れず、斯る災異朝に聞こえしに大同二〔807〕年空海勅を奉じて此の地に來り…秘法を修せしに因り、魔魅は…去りぬ〔。〕斯て空海山の名を〈磐梯（いわはし）〉と改め…因て此地に当寺を創建し…丈六の薬師金像…を安置せり、此時山神形を現しければ空海之を祝いて磐梯明神と称し…」と記されているとも、引き合いに出している。

すなわち、「恵日寺」とは、「往古この地天変地異が続き、悪気流が漂い五穀が稔らなかったの…加持祈祷したところ魔魅退散し、悪気は消除し、天日燦然としてあまねく恵みを垂れた、というより寺号となった」（367頁）として、「明（けらけき）神」にまつわる「恵日寺縁起」を、参照しているわけである。なるほど、往時は「風土病」たる「熱病」も流行したようであるから、「当寺」の「本尊」が「薬師如来（三）尊」であることは、頷けるものの、但しその「安置」のみならず、また「当寺」の「開基」も、むしろ「徳一（とくいつ）」により、しかも「大同元年もしくは二年に」と、『徳一』（47頁）で推定されている方が、また『町史』もそのように「空海による」とされているのを否定しているので、正しいと思われる。

となると、上記「峯の明神」とも尊称された「磐梯（いわはし）山の神」は、一応上記『町史』による「大伴修験由緒」の参照に即すると、更に「磐梯明神」としても、以後「慧日寺開基」の際に、同所にいわばその「守護神」として、既に祭られていたことになる。ただ、そうした所以については、「磐梯山」の他にも、周辺の「厩嶽山」や「猫魔ヶ岳」におけるいずれも「修験道」の修行や道場に帰され、伝承されてはいるものの、直接本稿の観点には当たらないので、もはや立入らないことにしたい。ともあれ、以上「磐梯山信仰」には、「山の神／祖神／明（天）神／田（作・農）の神」と、多様に「古代信仰」が、重層していることになる。

〈磐梯山の爆発／形状といわきさま〉

既に幾分ふれた標記の事項に関し、特に形状は、少なくとも県内・隣県では馴染みと思われ、写真を添えていないが、主に猪苗代湖北岸の「天神浜」辺りから眺めるおおよそ正面の「(表) 磐梯」が、おそらく最も代表的、ないし典型的な景観となつていよう。西側にひとときわ高く主峰「大磐梯」(1,819m)、東側に「櫛ヶ峰」(1,636m)が、深い「窪み」を間にして聳え、更に主峰の南側近くには「赤埴山」(1,430m)が連なっているものの、かなり低いばかりか、またむしろ主峰に付随

してもいるため、遠方では見分けられない。しかしながら、全体としてはいわば高い「三角〔円〕錐」と低いそれが立並び、間が凹んで「二段」に連なり、また低い方が「櫛ヶ峰」と呼ばれるように、双方の間が正に「櫛」形にもなっている。またそこで、それだけに主峰の稜線がより長く急に見え、高い方の「三角錐」が引立てられるため、やはり「磐（天のかけ）はし」を想像せしめるのであろう。

しかし、『町史』によれば、それは「明治 21（1888）年」の「（噴火・）爆発」後の山容であり、しかも既述の如き「大同元年」のそれも経てのことである。そこで、それ以前となると、「大同元年に爆発したという以前の磐梯山は、東西の稜線から推測するに山頂までおよそ、標高 2,200 メートルはあったろうという。」となると、「磐梯山」は、元々孤高の独立峰として、周辺からより際立って屹立した「三角（円）錐」であったことになろう。ともかく、「大同の爆発により標高一八一九メートルの大磐梯と、一六三六メートルの櫛ヶ峯と、その中間に大磐梯よりもわずかに低い小磐梯と、一四二六メートルの赤埴山の四峯をのこしたことになる。それが明治 21 年の爆発ではその小磐梯を約千メートルの深さまで根こそぎ吹き飛ばしてしまった。」（366 頁）とのことである。

ともあれ、次に「大磐梯」、「櫛ヶ峯」及び「赤埴山」は、既述の通り「明治 21 年以後残った」ままであるが、しかし「小磐梯」のみは、「1,000m も深く吹き飛んで」、むしろ深い凹みと化した、ということになろう。ただ、「会津磐梯山噴火の由来」（福島県立博物館所蔵）によると、また「小磐梯」は、1,760m も推定されているので、磐梯山全体は、むしろ四ヶ所の頂で「連峰」をなしていたことにもなる。但し、「小磐梯」は「大磐梯」の北側に位置していて、おそらく正面（南側）からはその蔭となって見えなかったであろうから、やはり真中が「櫛形」に凹んだ山容として、今日のように眺められたことであろう。

というのも、またそれは、先に冒頭でふれた「イワキサマ」という、地元や会津はじめ県内外での呼称として、並びに地名「磐城」の由来にとっても、それなりの事情において、何らか重要な関わりがあるように、推測されるからである。すなわち、『町史』によれば、そのように呼ばれてきた「磐椅神社」の「磐椅をイワキと読むのは誤りで、イワハシが正しい」といった見解があれば、また「明治四年十一月文部省指令」でも、およそ「磐椅神社とは磐椅山のふもとに鎮座することにより、磐はし山の神を祭っているところ、中古より磐梯山とも書いて、バンダイ山と唱え、神社をイワキと誤って、社山を異様に心得てきたため、終に本〔来の山〕号を〔忘〕失しているので、今後イワハシ山と称すべきである」といった旨、通達もされている（367 頁）とのことである。

但し、それはそれとして、旧来の「呼び習わし」は、字名・地名と同様、いわば伝統文化（財）であり、それ相応に所以あってのことに相違ない。というのは、まず「磐」は、再び「恵日寺御田植歌」の初めの文句、「とき〔常〕盤〔わ〕なす磐梯山」のように、「磐城」の「磐」と同じく「永遠の台座」の意味で、そもそも「磐座」に通じていることを示していよう。⁸⁾ 更に、それは本来「神の降（来）臨する御座」を意味していれば、また「磐椅」も、「椅」が「背もたれのある椅子」を指しているの、やはり同じように「神の台座」を意味しているに違いないからである。

しかも、「磐椅神社」が祀られている見弥山麓からは、今や種々の大木に覆われ、望見が困難

であるが、但し更にその南側の麓からは、「大同元年」以降磐梯山が、上記のように「大磐梯」の内側の長い稜線を「背もたれ」にして、「櫛形」の凹みに腰を掛ける「椅子」の如く、やはり「神の台座」として眺められたからこそ、正にそのように旧来呼び習わされてきたことであろう。ともあれ、そのように「いわきさま」は、元来「磐座信仰」に通じていることを、やはり物語っているに相違ない。

〈会津磐梯山は宝の山よ…〉

尚、標記の歌い出しで、あまりによく知られている民謡（盆踊り唄）「会津磐梯山」は、元々地元「玄如節」からの転用で、実に30番もの歌詞が続くようである。そして、昭和10年頃歌手小唄勝太郎のレコードに吹き込まれる際、特に「おはら庄助さん なんて身上つぶした…」のお囃子が入って以来、全国に広まり、有名になった、といわれる。ただ、それにしてもそうした転用からすれば、その文句や意味内容はそもそも地元由来する、と考えるのが普通であろう。現に、また歌詞には標記の地・山名はじめ、「東山／鶴ヶ城／白虎隊」等、名所・史跡やその繰返しも散見される。ところが、『町史』には、「この民謡のおこりは諸説があるがいわき地方では、漁師がその朝沖に舟出してはるかに磐梯山を望見した日は豊漁である、というのでそれで宝の山というようになり唄になったという。磐梯山は作神であり神徳はあまねく海の幸にも及ぼしている。」(374頁)と、記されている。

となると、まず文末は、磐梯山の神威は、本来「山の神・作（農）神」の霊威でも、また「海（天）神」のそれとしても、「海の幸」の恵みにまで及ぶ、との謂いであろう。因みに、前記⑤「住吉神社」と⑥「岩出神社」の1kほど北西には、「第一次」で言及したように、高さ150mほどの「青葉山」が位置していて、頂上付近は高さ30m、半周400mほどで、ことによると国内最大規模の「磐座」の痕跡と見られる。そして、そこからは東南に小名浜沿岸が望まれ、しかも近辺には「山の神／天神／日渡（ひわたし）」の他、谷合でありながら、正に「宝海」という地名も残っている。そうした諸要件・範例により、またそうした「神徳」の「由来」も、決して領けなくはない。次に、また文頭の「謂れ（わけ）」は、正に「宝の山」という「文句」が、その「由来」に関する諸説のうちの一説であれ、それなりに有力と思われたからこそ、示されたのであろう。

それにしても、実に意外である。というのは、本稿の観点は、以下の小括でも明らかなように、ほぼ専ら磐梯山西・南麓からいわき地方への宗教的影響のみ念頭に置き、上記の「由来」の如き逆のそれなど、ほぼ全く予想だにできなかったからである。しかし、いわき沖から磐梯山が、それとして確実に望見できるものか否か、そもそも重要な問題である。さしあたり、沿岸の平野部では、北の「二ツ箭山」から北西の「水石山・赤井嶽」、西の「湯ノ岳」までは標高約800～600m、以南は400～300mほどの山脈や尾根が連なり、阿武隈高地東南端が海岸線まで大体30～50k迫っている。どこからも見えない。そこで、次に地図を頼りに地理上の可能性を模索してみると、逆に「大磐梯」の頂上(1,819m)から小名浜や勿来までの方向を、その間これといって視界を遮るような高さの山々が見当たらないので、最適な候補として例にとると、方角は東南、距離は約100k、殆んど国道49号線に沿っている。

ただ、磐梯山頂上から20k先の中山峠付近には「額取山」(1,009m)が、その先郡山を経ておよそ中間に当る平田村には「蓬田岳」(952m)が位置しているが、いずれも800mほどの標高

差があるので、さほど障害にはならないであろう。それに、その程度の距離は、県内からも富士山が望める地点があるようなので、時節や気象・時間帯等、好条件さえそろえば、特段問題ではないであろう。但し、またいわき沖からにしても、「大磐梯」とその10k北及び東15kの範囲は、「西・中・東吾妻山」(2,035 / 1,931 / 1,975m)と「安達良山」(1,700m)が、三角形をなして隣接していて、標高があまり違わないため、更に小名浜や勿来から、どのくらい沖に出るべきかも、全く見当が付かないが、「磐梯山」をそれとして確実に眺められるものか、相当疑問である。したがって、当面その点は、付近で操業する漁師に確かめるべきであるが、それも含め、以上の可能性や疑問は、少なくとも今後の課題として、検討されなければならない。

ともあれ、ここで上記2)に戻り、「資料」⑧～⑬に従って調査報告を再開すると、およそ以下の通りである。

⑧⑨磐梯町の「磐梯神社」、「磐座」及び「閼伽井戸明神」——（磐梯町駅より）北、約2k、(目測)850m

標記の「神社」は、既述したように「磐梯明神」として、しかも「慧(恵)日寺」が開基される以前、既に同所ないし近辺に遷宮されていたことになるが、当「寺院」は以後およそ1,000年にわたり、当初まもなく隆盛を極めた後、しだいに衰運の一途を辿ることになり、いわゆる「廃仏毀釈」によって明治2(1869)年、廃寺になる。またそれにより、その薬師堂が「磐梯神社」として祭られ、大正12(1923)年に社殿も建立されたことで、そうした経緯において、正に「かつて恵日寺に庇を貸して母屋をとられた磐梯神社は〔ようやく〕ここに独立し、往古の姿に還る。」(『町史』371頁)ということになる。但し、昭和45(1970)年「恵日寺」跡が国の史跡に指定され、復元整備が計画されるに及んで、平成12(2000)年そこから約50m北東の現在地に、旧社殿のまま移築されるに至る。

したがって、「磐梯神社」本来の祭祀は、「大同元年」の磐梯山爆発により、その「奥宮」が失われ、また「磐梯明神」としての「遷宮」跡も定かでなければ、更に旧社殿も移築されているため、その現在地に、「恵日寺跡」の内であるにしても、直接足跡を求めることは、むしろ不可能である。但し、そうした神仏融合・交替の経緯においても、それら双方の由来・縁起が例祭・共同体祭祀や神事・年中行事として、可能なきがり継承され、また命脈も保ってきているはずであるから、ある程度は痕跡が伺われよう。⁹⁾

そこで、現在地の境内に入ると、入口右手の大きな桜の脇に、⑧のように注連縄が張られた高さ2・幅3mほどの立石が目に入る。これは、元々ここにあったものか、また他から移されたものか、不明ではあるが、明らかに「磐座」と目される。但し、そのみならず、また「山の神」の祭祀にとっても主たる要件をなし、並びによく「御神(霊)木」ともいわれる当該関連の様々な古・大木が、全く見当たらない。ただそれは、同所がいわば新開地だからであろう。回りを見渡せば、特に上方はそうした樹木に事欠かない。

しかも、既に下の「恵日寺跡」の入口に入っただけで、庭先に潤沢な「湧水」が目に入っていたが、また当「神社」入口の道路脇にも、むしろ「花川」が流れている。それどころか、本殿の周りに少なくない社や祠のうち、⑨のように手書きではあるが、明らかに「閼伽井戸明神」と記さ

れた石祠も、殊更目を引く。というのは、この「関伽井戸」は、既述した②③の「赤井嶽」の「関伽井」に、それが本来「仏に供える水（源）」として「引法水」と同様、おそらく上記の「湧水」にまつわるものと類推され、共通しているに違いないからである。ともあれ、以上はいずれも、「山の神／磐梯信仰」の要件・範例と見なされる。

⑩猪苗代町の「磐梯神社」と「鳥居杉」——（猪苗代駅より）北、約4k、600m

当「神社」の「由緒」については、初め磐梯山頂上に「和同（708～714）年中〔に〕鎮座」とか、弘仁（810～823）年中〔に〕見祢山南麓に遷座」として既にふれたが、また「社伝」によると、前記と同じ「和銅年中の鎮座」の他に、「神功皇后の摂政時代の250年、武内宿禰により〔同山頂に〕創建」とも、及び「天平元（715）年あるいは弘仁四（814）年同南麓に遷座、十世紀の初め〔905年〕〈延喜式〉神名帳に耶麻郡一座としてあり、見祢明神・峯明神とよばれ、承元元（1207）年（鎌倉時代）現社地に、猪苗代城主が遷座」となっている。となるとこの場合、「武内宿禰の鎮座」と「猪苗代城主による（二度目の）遷座」が加えられてより詳しく、且つまた先に同じく武内宿禰による「住吉神社勧請」の年代が、かなりくい違っていたのに対して、特に「250年」がむしろ「神功皇后の摂政時代」に入るように、いずれの年次も、おそらく正確と見られる。尚、そうした「見祢・峯の明神」という尊称は、むしろまた「会津はもとより県内外の人々から〈いわきさま〉として親しまれている」というように、「親称」として、やはり伝えられている。

但し、「磐梯」と書いて「いわはし」と読むことについては、先に『町史』が言及した「文部省指令」に適っていれば、また「会津磐梯山は明治二十一年の大爆発で変形したが、以前の山容はととのい、山頂は高く天に向かってそびえ立っていた石（磐）の梯（はしご）すなわち〈いわはし〉の山であった」と、同じく先に『町史』が説いていた「想像」と、やはり同様である。しかし、「以前の山容はととのい」とはいえ、既に「大爆発」以前「大磐梯」のみならず、また「櫛ヶ峯」もその名称とともに、「大同元年の爆発」以後残っていたわけであるから、「以前の山容」も今のそれと、双方の峰の間が「櫛形」に凹んでいたことは、少なくともその南側正面から眺めたかぎり、あまり変わらなかったことであろう。

となれば、「見祢山南麓に遷座された磐梯神社」を「いわきさま」と呼ぶ「親称」は、「磐のかけはし」とともに、また既述した如き「（神の）磐椅子」、すなわち「磐座」とも想われたことを、やはり所以としていよう。因みに、如上の「耶麻郡一座」の「座」は、旧来「神社に祭られる神を数える言葉」に当るものの、また同じく「遷座」にも用いられ、しかも一般的には第一次的に「すわる場所・座席」を意味しているように、むしろ「神の御座」を指示していることから、やはり「神の（磐）椅子」として「磐梯」を解することは、以上「社伝」でふれられていないが、決して的外れではないであろう。

ともあれ、「磐梯神社」の前に立つと、特に「鳥居杉」が、写真⑩のように注連縄で飾られていて、直ちに目を引く。西側のそれは、昭和33年の台風で倒潰したと聞けが、東側のこの古木は、正に前記「赤井嶽」の「龍頭杉」に勝るとも劣らないほどであり、またそれに準ずる巨木は、500mほど西の「土津（はにつ）神社」から至る、豊かな水量の用水路に沿った参道の周りに、無数に生え立っている。因みに、この「神社」は、その「案内」によれば、徳川四代将軍 家綱の後見人として、実質的に権力を預かった名君とされる会津城主 保科正之公の遺志により、そ

の靈廟及び「磐椅神社」の末社として、祀られている。また、そうした事情・経緯については、更に「年表」で詳しく記されているが、一般に「津」は「港／岸／がけ」を指しているものの、当地点は「山の麓」であり、また「訓」では「うるおう」とも読むので、おそらく「土のうるおう」、すなわち上記の如き潤沢な水量やそれによって育まれる「大杉の杜」等、いずれも「山の神」の靈威に因むことを、やはり物語っていよう。

しかし、他にはとりわけ「磐座」を想わせる立石や平・長（列）石等が、周りに何ら見当たらない。というのも、それは上記の通り、特に当「神社」の「(二度にわたる)遷座」に、また前記「磐梯神社」の「遷宮」や「移築」とおよそ同様の経緯・事情として、やはり帰されるからであろう。とはいえ、先に考察した通り、「いわきさま」は「神の磐椅子」の意味で解しうるに違いないことから、この「神社」にそもそも「磐座信仰」の伝統を看取することは、おそらく当を得ていよう。

①②③郡山市湖南町福良の「隠津島神社」——（上戸駅より）南、約 20k、

周辺の中心地 福良までは約 14k、そこから更に 6k ほど南方に位置している当「神社」は、まず既に手前の参道入口から本殿の周りにかけて、上記諸「神社」の周辺と同様の杉の大（古）木をはじめ、特にミズナラや樺・杉・榎、ないし部分的にはそれらの原生林で覆われ、そして特に入口右手の「菅谷地」には「菅」が密生していて、それによって「菅明神」と呼ばれ、また地元では「おすげ様」とも呼び習わされている。次に、同じく「菅」に因んでそれ自体がそうであるように、以上の樹木と沼、川、滝は、すべて「蛇」の象徴に相当する。

更に、この「山の神」の「遣い」は、本殿の裏手の左上方に構えられている「風穴（堂）」の中に①のように、蔓の大木が「蛇神」として彫られていれば、その台座になっている高さ 2・幅 3m ほどの「大岩」の底には、人が入り込めるほどの「風穴」が、②のように空いている。しかしそれは、そのように呼ばれるべきではなく、正に「赤井嶽」の「胎内くぐり」と同様、むしろ「蛇の罅」や「母胎」に「見立て」られてのことで解されるため、それ相応に称されるべきである。更に、その右手は③の「烏帽子岩」が、高さ 10・幅 15m の「三角錐」の形状で控えていて、また前記「住吉神社」の「磯山」と同様、明らかに海蝕の跡が認められ、正に「神体山」や「神籬」に相当するものと、見受けられる。尚、当「神社」は、旧来「雨乞い」の儀礼行事でもよく知られている。したがって、以上はいずれも「山の神・天(明)神・磐座信仰」の要件、範例として、また総じて典型もなしているもの、と見ることができる。

2. 小括 —— 地名「磐城」は、一つに「磐梯山」信仰に由来しているかもしれない

さて、以上 1. 中間総括（調査報告）の 1) と 2) の通り、「磐座信仰」を含む「山の神・蛇・天神」信仰の遺跡としての諸要件・範例を確認・収録してきた結果、最後にそれらを本稿冒頭の趣旨に立ち返り、特に標記の関連について、手短かに考察したい。

1) 「磐城」と「いわきさま」

まず、地名としての前者の表記については、既に「第一次」の冒頭で、「奈良時代（710～794 年）における律令制下」のいわき市勿来付近以北の「郡名」、及び近代に至って再び回帰した「明

治令制国名」として言及した。また、後者についても、いつの頃からかは不明であるが、「磐椅神社」の通（親）称として、取扱った通りである。ただそれは、後者が「櫛ヶ峰」の名称を手掛かりに「磐座」同様、「(神の) 磐椅子」と解される場合、この「峰」が残った「大同元年」の磐梯（いわはし）山の爆発以降、ということになろう。

更に、両者は音読みで、いずれも「イワキ」として共通し、また「磐梯山」も含め、いずれも「磐」が用いられることも、やはり共通している。尚、それには例えば「石（岩）城」や「石梯山」のようにではなく、むしろ「磐」が用いられていることは、そもそもそれが最も適っていたが故にであろうから、またそうした所以においてこの漢字の訓読みや語義もむしろ顧慮されるべきことは、既に注8) で指摘した通りである。

2) 「赤井嶽」と「恵日寺」における徳一による「薬師如来」の安置及び「關伽井（戸）」

次に、上記と同様の共通項として顧慮されるのは、また標記の通りである。まず、「徳一大師」が後者の「剣ヶ峰」頂上の「薬師如来」を807年頃「現常福寺の場所に安置」した、とされていることは、以下でも明らかなように、少なくとも年次については、それが重なるので考えにくいとして、既に述べたとおりである。

何故なら、「徳一」は既述のように、「大同元年ないし二年」の「慧日寺創建」の際、同じく「薬師如来を安置」しているの、しかもそれは、特に『徳一』（78頁）によって一応の目安とされているように、「大同二～天長元年（807～824）年」の「会津時代」に該当し、また以後の「天長元年～承和九（824～842）年」の「〔磐城のおよそ南部を含む〕常陸時代」に、むしろ「赤井嶽における安置」が相当する、というように考えられるからである。

更に、『町史』では「徳一開基と伝える寺院は…福島県いわき市に十一カ寺、安達郡に三カ寺、会津に九カ寺…」(368頁)とも、それ以外も含め地元会津を凌ぐ最多数にのぼることを、ある史料（「徳一と恵日寺」で参照している。となると、「徳一」の「磐城」における「仏教伝道」としての「教化活動」は、会津におけるそれにおよそ比肩していたことであろう。と同時に、また「赤井嶽における薬師如来の安置」も、年次はともかく、決して考えられなくはない。尚、他には既述の如き「武内宿禰」の「住吉神社」及び「磐椅神社」の「勧請」も、如上の共通項と見られなくはない。しかしそれらは、「250年」の年次が確かでも、いずれも年代が「大同元年の爆発」前に当り、少なくとも「櫛ヶ峰」の名称に関わらないので、ここで直接顧慮するには値しない。但し、そうした「勧請」が事実であれば、「磐座信仰」においては共通し、また間接的な関わりも捨て切れないので、特に更なる史料の探索が、今後の課題となる。

3) 「いわきさま」から「磐城」へ

しかし、以上共通項が認められるにしても、そもそも「山の神・天（明）神・磐座」として由緒深い「磐梯山」信仰の波及により、またそれとおよそ同様「磐座信仰」に由来すると想定される地名「磐城」も、通称「いわきさま」が伝播したと見るには、何はともあれその間の媒介が、まず類推されなければならない。とはいえ、それには既に「徳一」の上記「安置」や、また（常磐湯本・湯長谷の「長谷寺」をはじめ）上記「いわきにおける十一カ所の開基」も、殊に目ぼしい。しかし、だからといって、またそうした伝播を直接何らか史料によって証示もしうるわけでは、何らない。

因みに、また民謡「会津磐梯山」の「宝の山」という文句が、既述の如く「いわき地方の漁師の謂れ」に帰され、しかも仮にそれによって特に「漁師」が「磐椅神社」をよく参拝し、その際「いわきさま」を持ち返ったことも、ことによるとありえたかもしれない。しかしそれも、また同様に証示されているわけではない。したがって、そうした伝播も、やはり想定の域を越えるものではないが、但しその可能性は、そうした「謂れ」からすれば、決して否めないであろう。

○おわりにかえて —— 今後の課題とその対応

なるほど、以上の想定は、あくまで如上の伝播の可能性によるわけであり、それを検討することが、今後最も重要な課題となる。但し、その主な対応としては、やはり如上の共通項、それも特に「徳一の赤井嶽常福寺における薬師如来の安置」は、事実としてまたむしろ「常陸時代」においてのこと、とも考えられなくはないので、その際の「教化活動」に関する史料を探索し、また「磐梯山」信仰の波及や「いわきさま」の伝播の可能性も模索することである。但し、またそうした「活動」は、計「十一カ寺」にも及んでいることから、「長谷寺」をはじめ）当該寺院においても、そうした探索が、次に試みられるべきである。

とはいえ、如上の信仰は、「山の神／蛇／天神」等、「岩-木・太陽」崇拜としての「磐座信仰」に、そもそもまつわっていて、その足跡は、いわき市内・周辺だけでも、まだまだ無数に見受けられる。例えば特に、それらを窺わせる地名（字名）に注目すると、便宜的ではあるが、市内の「区分地図」によるかぎり¹⁰⁾、「山ノ（之）神」や「山神前」が23カ所、「天神」や「天神前」が6カ所、「日渡」が4カ所と、計33カ所にも及んである。

因みに、更に「徳一」は、「奈良・興福寺／東大寺における法相宗の修行時代」、特に「大和国の多くの霊場を巡り、東国での修行に向かうべく、天（霊）告を受けた」（49頁）ともされている。となると、「徳一」もまたそうした「霊場巡り」において、上記諸々の古代信仰に通じ、それを基に「仏教伝道」を心掛けたことが、大いに推定される。

したがって、以上「徳一」の「教化活動」のみならず、また「磐座信仰」の足跡も、更に調査・探究されなければならない。

注

* 本稿は、現代社会学科「社会学演習Ⅲ／Ⅳ（4年生）」並びに「同Ⅰ／Ⅱ（3年生）」が昨年度来、及び特に「フィールド・ワーク演習Ⅰ／Ⅱ（2年生）」が本年度実施している調査活動（現地探訪）の報告であり、またそれは一昨年（2012年）度、上記と同様、茨木担当の演習で開始し、既に昨年度同題で本学大学院「人文学研究科研究紀要」第12号（2014年3月）に寄稿した「第一次報告」〔以下「第一次」と略記〕に引続く「第二次報告」でもある—— ため、「第一次」に(1)を付記していないものの、(2)を付記した。

1) 以上の聞知やネット情報は、昨年度調査までの地元居住者や郷土史家からの聞取りや、特にまた巨石・山岳信仰に興味を抱く関係者、更には当該神社・寺院の案内・紹介・資料閲覧にむけたブログやホームページによるものであり、いずれも一般的に調達可能であることから、逐一それらの入手先や情報源を明記するには及ばないであろう。但し、そうした情報における神社・寺院の創建や開基、祭神・本尊にまつわる縁起・由緒等に

については、言語的知識や概念として重要な端緒になりえても、本稿ではむしろ当該遺跡(物)の「形式(状)」や古代信仰の対象の「感覚(可視)・現象・象徴的な性質」を重視していることから、あまり言及せず、そうした端緒や「形式・性質」において重要なかぎり、顧慮したい。

- 2) 前掲書(中公新書、1997年)〔以下『徳一』と略記〕、73～74, 78頁
- 3) 当「神社」の「紹介」によれば、こうした「磯山」が「磐座・磐境(いわさか)」として、「磐座」には「ふりがな」が付されずに説かれているが、それらの「文字(文語)表現」を直接目にするのは、これまで3年にわたる「第一次/二次」の調査を通じて、初めてである。但し、その間の聞き取りで、むしろそれらの「音声(口語)表現」を耳にしたことは、未だ皆無であり、この古代信仰の呼称や概念は、明らかにそれと思しき遺跡(物)がこれほど多く散見されるにも拘らず、今や殆ど忘れ去られてしまったのかもしれない。
- 4) とすると、そもそもその意味で、「岩出山」と呼ばれたのかもしれない。また、例えば特に「岩手県」の「岩手」ともなると、本来アイヌ語で「岩石とともに暮す人々」を意味していた、といわれるので、そうした所以も考慮されないではない。
- 5) 序に、「岩出神社」から矢田川を挟んで東方約1k、鹿島町走熊の「高照山(たかてらさん)」が周辺一帯の最高峰(約126m)であり、頂上付近は「十一面観音」が祀られていて、今や「岩出神社」と同様の古木で覆われ、確認が困難であったが、「たかてら」という呼称からして、またかつては東方に江名沖の海が一望できたように見込まれるので、やはり「太陽崇拜」の祭祀が推測される。
- 6) この名称には、「祇」が用いられているが、一般に「大山祇(づみ)神社」は、そのように「祇」が用いられている。漢和辞典によると、後者はそもそも「大物主(おおものぬし)・大国主命」を祀り、「慎しんで重じる」を語義とし、前者はむしろ特殊に「(土)地神」を意味している。
- 7) 監修 理学博士 山口弥一郎編集 猪苗代町史編纂委員会(昭和54年3月1日)、特に『民俗編』、第一編 猪苗代の民俗、第八章 民間信仰、第一節 磐梯山信仰、363～382頁参照。
- 8) 尚、「第一次」で詳論したように、「磐」は「訓」では「わだかまる」と読み、「蛇が罅〔トグロ〕を巻く」を意味し、縄文時代の「堅穴式住居」がその「擬き(模型)」と見なされているように、そもそも「母体」の「見立て(仮想)」として、正に「蛇(信仰)」を象徴しているわけである。
- 9) 因みに、そうした共同体祭祀・遺制としては、いわゆる「イナバツ」の「頭屋制」が、殊に興味深い。『町史』によると、「磐梯明神の初穂は磐梯山を仰ぐ範囲の村々の農家が献納するのであるが、そのときの奉献饌供物を集めて歩くのが恵日寺の…大頭小頭と称するもの〔祭具〕で…ある。」そして、「この神事は二月十五日の御国祭の最初に行う行事である。大頭小頭の収める初穂は古い時代の現物神饌のしきたりで、これをイナバツという〔稲初穂の訛語〕。また、「大頭小頭というのは、〈頭〉すなわち〈頭屋^{とうや}〉のことで、当屋、党屋とも書き、大頭屋、小頭屋または兄頭、弟頭、あるいは本頭、脇頭などと呼ばれる…」更に、「頭とは…古い時代の祭りには神職以前には氏子一同が司祭した。一年まわり頭屋を一年神主といい…」(374～375, 377頁)と説かれている。尚、「大頭小頭のみなりは近年略装になり…」とあることから、「イナバツ」は最近でも継承されているのであろう。

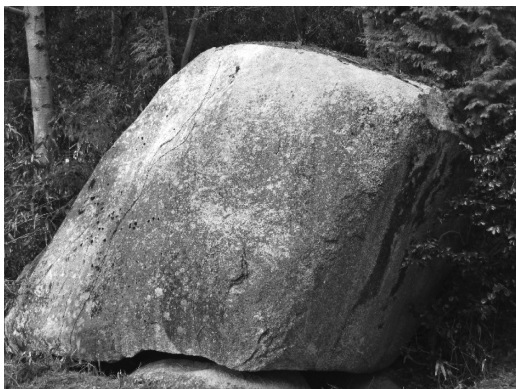
ともかく、如上の「神事/行事/しきたり」やそれを慣行する「頭屋制」は、主に「磐梯明神・恵日寺」の由緒・所以や旧来の「氏子・司祭・村落組織」及び「親族・家関係」もしくはその「擬制的関係」等を、少なからず反映しているように思われる。
- 10) 『ゼンリン住宅地図 いわき市(四倉・久之浜・小川版/平・好間版/小名浜・泉・江名版/内郷・常磐版)』(株式会社ゼンリン、1998/2001/2001/2001年)

資料

① 小川・丑の倉の「大石」



② 赤（閼伽）井嶽の「胎内くぐり」



③ 赤井嶽の「亀の子石」



④ 小名浜・相子島の「兜神社」



⑤ 小名浜「住吉神社」の「磯山」（裏側）



⑥小名浜・金成の「岩出神社」



⑦西会津「大山祇神社」の「(築造) 磐座」



⑧磐梯町の「磐梯神社」と「磐座」



⑨「磐梯神社」境内の「関伽井戸明神」(石祠)



茨木竹二：^{いわくら}「磐座」、岩-木・太陽崇拜の霊域としての^{いわさか}「磐境・磐城」
—— 地名「磐城」と^{いわはしやま}「磐梯山」信仰 —— [研究ノート・調査報告](2)

⑩ 猪苗代町の「磐椅神社」と「鳥居杉」



⑪ 「隠津島神社」の「風穴」内部の「蛇神」と「大岩」



⑫ 「隠津島神社」の「風穴」



⑬ 郡山市湖南町福良の「隠津島神社」の「烏帽子岩」



(いばらき たけじ／宗教学会)